



卑弥呼の首輪



カモフラージュ

春日信彦

照子の失踪

今回の糸島観光は拓也が提案したものだった。これには少し深刻な事件が絡んでいた。拓也の母校である糸島芸工高校の恩師であった原田大吾先生から四月の初めにメールが届いた。恩師は歴史の先生で今は退職しているが、この高校の歴史研究部の顧問をしている。拓也はメールの内容を何度読んでもピンと来ないため直に会って聞いてみたくなった。

メールのことをドクターに話したところ、ドクターから話を聞いた警察庁キャリアの野秀文、愛称コロダ君は一度歴史の街を探索したかったと拓也についてきたのだった。さらに、さやかとアンナまで田舎の澄んだ空気を思いっきり吸いたいと言ってついてきたのである。糸島市志摩に到着すると拓也たちは加也山登山道入口近くにある恩師の自宅に向かった。拓也は連れの紹介をすると恩師を囲んでメールの話を持ち出した。最初、恩師もどのように話しているのかしばらく深刻な顔をつくっていたが、考えがまとまったのか膝をポンと叩くとゆっくりと順を追って話した。恩師の話は実に不可解なもので他の3人も気味が悪そうに聞き入っていた。

歴史研究部の部長をしている山神照子が3ヶ月前の12月4日(日)に行方不明になった。朝出かけたまま戻らなかったそうだ。福岡県警も懸命に捜索したがまったく手がかりがつかめないまままだ。何かの事件に巻き込まれたのか、誰かに拉致されたのか、神隠しに遭ったのか、単に家出したのか、いまだに彼女の行方がつかめない。照子は父親晋作と二人暮らしであったが、失踪後、照子は神武天皇の後となった、照子は日本を守るために神となった、日本の自然は照子が守ってくれる、照子は全人類を守るために天に召された、俺が照子を神に捧げた、照子は日本の永遠の女神だ、と父親は意味不明なことをしゃべっては放浪するようになり、ついに精神病院に入院させられた。

恩師は間を置きながら、つばを飲み込み、話を続けた。今のところ県警も手がかりがつかめず足踏み状態で暗中模索に陥っている。どうも殺人事件とは関係ないと見たのか警察は単なる家出として捜索し始めているようだ。わしも、足を棒にして聞いて回ったんだよ。クラスメート、部員、近所の人たちにも話を聞いたがまったく気にかかるところがなかったそうだ。肝心の父親の頭がおかしくなってしまうので、パソコン部で彼氏の直人君からもいろいろと話を聞いたのだが特に変わった様子はなかったそうだ。

照子は社会の先生になりたいと言っていた。活発で明るく向学心もあり受験勉強にも力を入れていた。父親も教育大にやって先生にしてやりたいと三者面談のときに話していたそうだ。直人君は照子と古墳巡りをしては邪馬台国の謎について議論したそうだ。また、直人君が言うには小富士カントリークラブの黒猫は「卑弥呼」と言って照子が飼っていた猫で、照子が失踪してから13番ホールに現れるようになったそうだ。今のところ手がかりらしきものはなく、照子が生きて戻ってくるのを期待する以外ないと恩師は話を締めくくった。

拓也たちは聞き終わるとお互いの顔を見合った。誰一人言葉が出なかった。拓也は「照子さんが元気に帰ってくるといいですね」と言って悲痛な顔をしている恩師をねぎらった。4人は雷山にある桂会長の別荘に到着すると、早速小富士カントリークラブの黒猫に会いに行くためゴルフ場の予約を取った。

幸運の黒猫

拓也たちは二日前恩師から聞いた黒猫に会いに小富士カントリークラブにやってきた。そして、13番ホールに到着すると運良く黒猫が現れた。さやか、アンナ、コロダ君、拓也たちはうわさの黒猫をティーランドからじっと見つめていた。昨年オープンしたばかりの志摩にある小富士カントリークラブは、一年も経たないうちに全国的に有名になった。と言うのも、13番の125ヤードショートホールは黒猫が現れるとホールインワンが出るのである。

最初に打つアンナはオレンジのボールをティーアップすると軽い打ち下ろしをイメージして9番アイアンで軽くスイングした。「ナイスショット！」キャディーは歓声を上げた。バックスピんがかかったボールはピン左上2ヤード地点に落下した。理想的なポジションに落ちたオレンジのボールはゆっくりとピンに向かって転がりバーディーチャンスにつけた。

アンナはバンザイして喜び、さやかと拓也は大きな拍手をした。だが、コロнда君はうらやましそうな顔でグリーンを見下ろしていた。アンナと一打差のコロнда君も青のボールをティーアップすると9番アイアンでゆっくりとスイングした。ボールはピン右上約3ヤードに落下した。寝そべっていた黒猫の顔の前に落下したのだが、まったく驚く様子もなく黒猫は転がる青いボールを見つめていた。

二人のシングルの後にへたれの拓也が震えながら黄色のボールを高くティーアップした。内股の拓也は7番アイアンでゆっくりとバックスイングをすると歯を食いしばって思いっきりフルスイングした。全員グリーンに目を向けたがボールはどこにも見当たらなかった。ティーから落ちたボールは拓也の前で笑っていた。「ティーアップが高すぎたのかな？」拓也はもう一度低くティーアップすると大きく深呼吸して軽くスイングした。トップ気味のボールはグリーン奥のバンカーに埋もれた。

ミラクルショット連発のさやかは鼻歌を歌いながらピンクのボールをティーアップするとジュニア用の短い7番アイアンで盆踊りでも踊るかのようにスイングした。ピンクのボールは突然吹いた風に運ばれてピン右下約3ヤードに落ちた。黒猫はグリーンに落ちたピンクのボールをぼんやりと眺めていたがゆっくりと起き上がるとボールに向かって歩き出した。みんなは黒猫がボールをくわえていくのではないかと目を凝らして窺っていると、ボールの前に来た黒猫は左手でボールをちよいと転がした。ボールはまっすぐ転がると見事にカップインした。

「キャ～！ホールインワンだ！」さやかはジャンプして歓声を上げた。そんな馬鹿な、拓也はキャディーの顔をうかがってみると「ホールインワンです、おめでとうございます」キャディーは考えられないことを叫んだ。この珍事はいつの間にか公認されるようになっていた。「幸運の黒猫」は小富士カントリークラブの女神になっていたのである。黒猫は3ヶ月前から突然現れ、なぜかこのようないたずらを始めたのである。

4人が軽い下り坂をトボトボと歩きグリーンに到着するとキャディーは拓也にサンドウェッジを手渡した。しかめっ面の拓也はクラブを担いで地獄のバンカーに飛び込んだ。「どうか三回で脱出できますように、神様」と心の底でつぶやくと思いきりサンドウェッジをボールめがけてぶち込んだ。砂は大きく舞い上がり、目を閉じた拓也は頭から砂をかぶり「ワ～」と悲鳴をあげた。

目を開けると砂をかぶったボールは目の前で沈黙していた。大きなため息をつくと目を吊り上げて、やけくそでもう一度クラブをぶち込んだ。奇跡的にバンカーから飛び出したボールはグリーンに落下すると、勢いよく転がりうつぶせに寝ていた黒猫のお腹に激突して止まった。黒猫は一瞬目を吊り上げて拓也を睨んだが立ち上がることもなく再び目を閉じた。

コロンダ君は黒猫の顔の前を転がしてツーパットでパーとした。拓也は黒猫の横にある黄色いボールをパットしたいのだが、黒猫がいたのではパターを振ることができない。他の3人も静かに黒猫を見ていた。意を決した拓也は黒猫にお願いした。「黒猫さん、少し前に行ってくださいませんか、お願いします」拓也は両手を合わせて頭を下げた。だが、黒猫は動こうとはしなかった。

困り果てた拓也はキャディーの顔を窺った。すると、キャディーはボールを拾い上げ打ちやすい場所に置き「特別ルールです、どうぞ」とキャディーは笑顔をつくった。あっけにとられた拓也は機嫌を損ねないように黒猫を静かにまたぐとアドレスに入った。どうにかツーパットでホールアウトすると全員で黒猫に手を合わせて次の14番ホールに向かった。

卑弥呼の首輪

拓也たちは「幸運の黒猫」の存在を確認したが「不幸な照子」の行方の手がかりはつかめなかった。別荘に到着すると今後の予定を確認した。拓也の予定は姫島に住んでいる父親に会いに行くこと。コロンダ君は遺跡巡りをすること。さやかとアンナは適当に観光すること。コロンダ君は明日出立して一人で東京に帰ると言った。拓也は明々後日の金曜日に別荘に戻ってくると言った。

3月7日（水曜日）、早朝、コロンダ君は曾根にある平原遺跡へ、拓也は志摩の岐志渡船場へ出立した。取り残されたさやかとアンナは朝食を食べるとどこに遊びに行くか話し合てはみたが、原田さんから聞いた照子のことが気になっていた。テーブルで頬杖をついてアンナがぼんやりと考え込んでいると正面のさやかがいつもの思い付きを話し始めた。「照子さん、死んでしまったのかな～、どこに眠っているんだろ～」縁起でもないことをつぶやいた。「え！どうして、死んだなんていうの？」アンナはさやかが何か手がかりでもつかんだのかと思った。さやかは思い浮かんだことを話し始めた。

「生きているかもしれないけどね、死んだと仮定していろいろと考えてみたの。照子さんが失踪して、ゴルフ場に彼女がかわいがっていた黒猫が突然現れたりもしたからね。思うんだけど照子さん、自殺したんじゃないかと思うの。そして、その遺体をお父さんがどこかに埋めてしまったんじゃないかとかね。生めた場所はおそらく、ゴルフ場のどこかに」

「なるほど・・・」アンナは目を大きくして聞き入っていた。「原田さんの話によると自殺するような様子ではなかったと言っていたじゃない、そうね、きっと自殺の原因は自分のことではなくお父さんのことじゃないかと思うのよ。と言うのも、照子さんが失踪してお父さんは気が変になったじゃない。つまり、自殺の原因はお父さんにあるということなのよ。自殺しなければならぬほどのことがお父さんにあったということね、それは何かわからないけど」

「お父さんが・・・」アンナの顔が少し紅潮してきた。「う～ん、黒猫が何か知っているわね。警察は家宅捜索とか彼女にかかわっていた人たちを徹底的に調べたと思うけど、黒猫は尋問してないでしょ。日本語が話せないものね。この事件を解く鍵を握っているのは黒猫だと思うな。黒猫とじっくりと話し合えばきっと何かわかるわ。黒猫がゴルフ場に現れたのは私たちに伝えたメッセージがあるからに違いないよ」

「さやかって、とんでもない思い付きをするんだね。日本語が話せない猫とどうやってじっくりと話し合うの？」アンナは何の根拠も無いたわごとにあきれてしまった。「自分でも馬鹿なことを思いついたと思うよ、誰かに拉致されて殺されたのかもしれないし、いや、拉致されてどこかの国で元気に生きているかもしれないね。だけど、答えは黒猫が知っていると思う。黒猫にもう一度会ってみようよ、アンナ」さやかの頭の中で黒猫が「ニャ～」と鳴いていた。

一方、コロダ君は平原遺跡を見学するところの近くに住んでいるという古田直人君の家を訪ねた。直人は照子さんについて知っていることはすべて警察に話したに違いないが、照子さんのお父さんについて知っていることはすべて話していないと考えた。照子さんの失踪の原因は父親にあると考えたコロダ君はじつくりと直人君と話をしたかった。午後6時ころ直人君は学校から帰ってきた。

コロダ君は原田先生の知り合いの的野と名のると、失踪事件について話を聞きだした。直人君は思い出しながらゆっくりと話し始めた。何度か、照子さんの家に遊びに行って、お父さんとも話しました。お父さんはとても温厚でお話好きの方でした。特に、明治維新の歴史が好きな方でした。山神家は代々続いた農家でおじいさんは町会議員をやっておられました。お父さんもいずれ市会議員に立候補されると聞きました。

ゴルフは九州オープンにも出場されるほどのトップアマということで、照子さんにゴルフを教えていました。照子さんもゴルフはシングルと聞いています。親子で伊都ゴルフクラブの会員だそうです。理由は知りませんが、両親は照子さんが小学生のころ離婚されたそうです。あくまでも聞いた話ですが、お母さんは二丈の旧家のとても美しいお嬢さんで、結婚する前は小学校の先生をされていたそうです。町会議員のおじいさんの紹介でお見合い結婚をされたそうです。

お父さんは信心深い方で一度神様についてのお話を聞いたことがありました。そのとき、自然を破壊する人間は必ず神様の天罰を受けると、つばを飛ばしながら言うておられました。それと、神武天皇のご神体であるこの山を決して汚してはならん。わしは、死ぬまで神武天皇をお守りしなければならん。神武天皇を冒瀆するものは絶対に許さん。こんなことも言うておられました。意味はわからなかったのですが、適当に頷いて聞いていました。

そうだ、3年ぐらい前、加也山にマンション建設の話が持ち上がったとき、先頭に立って反対されました。そして、現場の下見に来ていた所長さんが事故で亡くなられたそうで、結局マンション建設は中止になりました。聞いた話ですが、約10年前には高圧電線を加也山に通す話があったそうですが、そのときもお父さんが先頭に立って反対されたそうです。これも結局、中止になったそうです。

あ、照子さんの話では、小富士カントリークラブがつくられるときは反対されなかったそうです。ゴルフ場開発のためにお父さん所有の土地を高額で買い取ってくれたそうです。これは不動産会社の策略じゃないかと勝手に思っているんですが。村の人たちは最後まで反対しましたが、結局ゴルフ場はオープンしました。農閑期には管理作業員としてそこのゴルフ場でアルバイトされていたみたいです。

失踪する一週間ぐらい前ですが、お父さんが怖いと言っていました。お父さんは毎日、かなりのお酒を飲んで叫んでいたそうです。わしは天罰を受ける。お許してください、神様。なんか、そんなことを、お酒を飲んで毎日叫ぶようになったそうです。直人はそこまで話すとぼんやりと遠くを眺めた。

そうだ、冬休みに親戚のうちに一週間ほど泊まるからそのときは“黒猫の卑弥呼”をお願いね、と言っていました。お母さんのところかな、と思いました。いったい、照子さんはどこにいるんだろう。コロダ君は言いにくそうにたずねた。「照子さんが自殺したってことは考えられないだろうか？」目を大きくした直人は返事した。「絶対にありえませんよ。教育大に絶対受かって見せるって豪語していたんだから。すべてにおいて前向きで、とにかく負けず嫌いなんだから」直人は照子の気の強さを強調した。

「なるほど、ところで、黒猫とは仲がいいですか？」コロンダ君は本題に入った。「どういうことですか？」直人は意味がわからなかった。「悪かった、実を言うと黒猫の首輪がほしいんだよ。できれば黒猫から首輪を取ってきてくれないかね。あの首輪に 事件を解く鍵が隠されているように思うんだよ」コロンダ君はパターをするとき黒猫の首輪の内側に何かくっついているのを見逃さなかった。「首輪を、ですか？どうかな～、何度か遊んだことはあるけど・・・いいです、やってみます」意味のわからないお願いだったが解決の役に立つことであればと思い快く引き受けた。

照子のメッセージ

黒猫はきっと今でも家にいると思い、翌日、直人は部活をせずに学校から帰ると誰も住んでいない大きな木造の家に自転車を走らせた。山神家の家は村ではかなり大きいほうで母屋のほかにトラクター、耕運機、トラック、などが並んだ大きな納屋が西側にある。東側にはグリーンネットを張った照子のためのゴルフ練習場がある。南向きの玄関は鍵がかかって中には入れなかったが、東側の勝手口の鍵はかかっていなかった。外から卑弥呼、卑弥呼、と何度か呼んでみたがまったく泣き声一つ聞こえてこなかった。

無断で家に入るのには気が引けたが、何度か遊びに来ている家でもあったので、ごめんください、と言って勝手口から堂々と入って行った。入ってすぐ、右手にリビングとキッチン、左手に和室と大きなシャンデリアのある応接間、廊下をまっすぐ行くと突き当たりに二部屋に仕切られた掛け軸がかかった床の間、突き当たったところから右に曲がると照子の部屋がある。足跡がつかないように忍び足で卑弥呼がないかと各部屋を覗きながら照子の部屋に向かった。

照子の部屋をそっと開けるといつもと同じように左手に大きなベッドが横たわっていた。そこにはキティーちゃんの布団とピンクの枕が几帳面に整えられていたが、埃にまみれて悲しそうであった。その奥には整理整頓された勉強机とその上にノートパソコンがおいてあった。部屋は少し薄暗くて気味が悪かったが、かつて照子と二人でベッドに腰掛けて邪馬台国の謎の話をした思い出がよみがえってきた。

言っていた、トラックの中でギターを弾きながら大きな声で歌うと気分がすっきりすると。助手席のドアを開けるとギターを取り出した。黙ってもって帰ると泥棒になると思ったが、照子があげると言っているような気がして、もって帰ることにした。ギターを手を取ったとき運転席のシートの色に気づいた。やはり・・・卑弥呼はここに戻ってくる。直人の勤は当たっていた。

すこし嫌気を差した直人は歌舞伎門の階段に腰掛け卑弥呼が帰ってくるのを待ったが、なんだか寂しくなりすべてが虚しくなってしまった。照子のアコギを膝の上においてぼんやりしていると、20メートルほど先にタクシーが止まった。無断で家の中に入り込んだので、一瞬、ヤバイと思ったが逃げる気力は無かった。タクシーからは背の高い美人と子供のような女性が降りてきた。

二人は近づいてきたが直人は開き直って座ったままコンチワと挨拶をした。さやかとアンナはとりあえずこの見知らぬ少年と仲良くすることにした。さやかとアンナも黒猫を探しに照子の家にやってきたのだ。さやかは少年にたずねた。「このあたりで赤の首輪をした黒猫を見かけなかった？」アンナは大きな庭と立派な瓦葺の木造建物に驚いて、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「この家の黒猫だったらいいよ」直人は立ち上がると二人の横を通り抜け帰ろうとした。「どこに行けば会えるかな～？」さやかはさらに訊ねた。「そんなことわからんよ、ずっと待ってたら、帰ってくるんじゃないか」直人はギターを担いで立ち去った。「こんな気味の悪いところでずっと待つのか」アンナはしかめっ面をした。さやかとアンナはしばらく待つことにした。夕方7時ぐらいまで待ってみたが黒猫は現れなかった。

直人から黒猫に会えなかった報告を受けたコロнда君は黒猫に会うために、金曜日の1時半ころ小富士カントリークラブに出向いた。受付カウンターで警察手帳を取り出して「かの有名な黒猫にお会いしたいんですが」と切り出すと受付嬢は目を丸くして飛んで事務所に駆け込んだ。それを聞いていたコンペのゴルファーたちがコロнда君に鋭い視線を浴びせた。2, 3分すると血相を変えた中年の事務員が飛び出してきた。

「黒猫とゴルフ場は関係ありませんが」事務員は警察とはかかわりたくないような態度をとった。「いや、たいしたことではありません。13番ホールに案内していただけますか、決してプレーの邪魔になるようなことはいたしません。お願いできますか」コロнда君は小さな声で優しくお願いした。事務員はきよとんとした顔を見ると「はい」と言ってクラブハウス管理事務の西にある業務用駐車場に駆けていった。

事務員は軽トラを玄関に着けると助手席のドアを開けた。二人が13番ホールに到着するとコンペのプレーヤーたちがグリーン上でパットをしていた。そこには黒猫はいなかった。時計を見ると2時5分前であった。二人はグリーンから離れた場所で黒猫が現れるのを待った。「刑事さん、黒猫は毎日現れるわけじゃないんですよ、確かに、ブログを使ってゴルフ場の宣伝に黒猫を利用したことは認めますが、それがそんなに悪いことですか？」事務員は早くここから立ち去りたかった。

「別にゴルフ場を調べにきたわけじゃありませんよ、チョット、黒猫に聞きたいことがあるだけです」にやりと笑って冗談を言った。事務員は鳩が鉄砲玉を食らったような目をした。二人は1時間ほど身をかがめてグリーンを見つめていたが、黒猫は現れなかった。「黒猫に感づかれましたかな、ご迷惑をかけました。引き上げましょう」コロンダ君は両手の手のひらを上に向けた。

首輪が手に入ったら連絡してほしいと直人君に電話するとコロンダ君は吉野ヶ里遺跡に向かった。さやかとアンナは朝早くから照子の家に張り込んで黒猫が現れるのを見張っていたが、やはり現れなかった。黒猫に会えず3時ごろ別荘に戻ると拓也が玄関に座り込んでいた。「待った？」アンナは拓也に飛びつくとチュ～をした。「黒猫はどうだった？」拓也は電話で張り込みのことを聞いていたので気になった。

「ダメ、全然ダメ」アンナは拓也の土産袋を手にとると玄関に飛び込んでいった。三人がキッチンに着くと黒猫の話になったが、事件は警察に任せたほうがいいんじゃないかと拓也は冷たくあしらった。「拓也って、意外と冷たいのね」アンナはみやげ物を広げては笑顔をつくっていた。「これ誰に上げるの？アンナにもあるんでしょうね」アンナは土産物が気になってしょうがない。「みんなの分とドクターの土産もチャンと買ってあるよ。姫島はいいところだ。改めて島の良さを感じ入ったよ」拓也は父親から何かいいことを聞き出してきたようだった。

土曜日の朝、原田先生宅に挨拶に行くと、時々、黒猫がやってくるので餌をやっていると聞かされた。さやかは是非黒猫に会いたいと先生に言ったところ、昼ごろには餌を食べに来るだろうと言われ待つことにした。だが、黒猫は現れなかった。さやかは心残りであったが、日曜日の朝、出立することを先生に伝えて天神の街に向かった。

さやかたちが糸島を出立して一週間後、直人からコロンダ君にメールが送られた。昨日、原田先生と話をしていると、餌を食べにひよっこり卑弥呼が現れました。卑弥呼、卑弥呼と呼ぶとやってきたので頭をなでて膝の上に乗せました。首輪を取っても怒らないだろうかとおそるおそる首輪を取りました。卑弥呼は気持ちよさそうでした。首輪の裏を見ると小さく折りたたまれた手紙がビニールに包まれてボンドで貼り付けてありました。約束なので的野さんにはメールしますが、できれば、警察にメールのことは黙っていてくれないでしょうか。お願いします。以下、書いてあった内容をそのまま書きます。

～ 直人君へ！～

卑弥呼の首輪は直人君しか取ることはできません。だから、安心して話せます。心配かけてすみません。きっと大騒ぎになって、警察も必死に捜索したでしょう。本当にごめんなさい。お父さんはいい人です。神に仕える素晴らしい人です。でも、父はある罪を犯しました。それを私は知ってしまいました。このことを警察に言わなければ私も共犯と言うことになります。

望東尼のように強い女性になりたいと思っていましたが、私には無理でした。考えた結果、この世から消えることにしました。許してください。直人君と別れるのはとても悲しいです。直人君との思い出が一番の宝物です。どこにいても、直人君のことは決して忘れません。今度生まれ変われたら、結婚してください。大好きな直人君、さようなら。

卑弥呼の首輪

<http://p.booklog.jp/book/48952>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48952>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48952>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.